

「宜野湾高校の生徒達へ(22)」で鉄血勤皇隊について触れた。今回は、同隊員について聞き取り等を行ってきた大田光さんの記事(沖繩タイムス9/4)を紹介する。

戦争を知らない大阪府出身の若者が沖繩県に移住し、平和ガイドとして戦争体験の継承に取り組んでいる。原動力は、友人を見捨てたことを悔やみ続けて亡くなった元男子学徒の思いだ。本土防衛の捨て石とされた沖繩戦から七十五年。犠牲者を追悼する六月二十三日の「慰霊の日」を前に、戦争の不条理を伝え継ぐ決意を新たにす。

福岡県の久留米大で沖繩戦を題材にした卒業論文をまとめていた大田光さんは十年前、最後の激戦区となった糸満市摩文仁で、県立第一中学校(現在の首里高校)の鉄血勤皇隊だった山田義邦さんの体験を聞いた。



大田 光さん

砲弾が飛び交う中、山田さんは負傷した友人を壕まで運べず、自決のための手りゅう弾を渡して置き去りにしてしまったという。果物や菓子をお供え、亡き友に語り掛ける後ろ姿に、「卒論で終わらせてはいけない。伝える側にならなければ」と心を揺さぶられた。(中略)

沖繩戦に向き合う原点となった山田さんは三年前、八十九歳で息を引き取った。摩文仁に毎週通い、最後まで「自分が殺したようなものだ」と友人の死を悔いていた。

山田さんを失った深い悲しみで何も手に付かず、高齢の元学徒らと関わることが怖くなった。それでも「戦争は人を一生苦しめ続ける。新たな犠牲者を出してはいけない」と山田さんと同じように自責の念を抱える元学徒らの思いを受け止める覚悟を決めた。

(中略)

見えないウイルスへの恐怖から差別や偏見が生まれ、異論を唱えにくい最近の空気は、戦争に向かったときと似ているのではないかと感じる。

「為政者によってつくられる世論の前に、立ち止まって考えないといけない」。山田さんが残した言葉の重みを今、改めてかみしめている。

右の記事から、山田さんが人生の大半を自責の念を抱え、生きてきたことがわかる。私たちは戦争の悲劇を繰り返してはならない。そのためにも「慰霊の日」を契機に平和に向け、私たちができることを考えてみよう。

琉球新報社説(9/4)は「平和教育 沖繩戦の継承大切」のタイトルで、次のように書いている(一部引用)。

県高等学校障害児学校教職員組合(高教組)と沖繩歴史教育研究会が県立高校2年生を対象に実施した「平和教育に関するアンケート」で、沖繩戦について話してくれる家族・親族が「いない」と答えた生徒が約五十二%になり、初めて半数を超えた。

戦後七十五年を経て、沖繩戦の体験者が減り、家庭で沖繩戦を学ぶ場面が失われつつあることを示している。

おびただしい数の住民を巻き込んだ地上戦が行われ、凄惨を極めた沖繩戦の体験を風化させないよう、学校において「沖繩戦の継承」を含めてどのように平和教育を進めていくかは、本校の課題でもある。